

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アーカイブ映像の創造的活用に向けて：
エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを事例
に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川瀬, 慈 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5827

アーカイブ映像の創造的活用に向けて —エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを事例に—

文・写真 川瀬 慈

かわせ いつし

文化資源研究センター助教。映像人類学研究。エチオピアの音楽・芸能をはじめアフリカの無形文化に関する民族誌映像制作に取り組む。代表作に『ラリベロッテ』、『Room 11, Ethiopia Hotel』、『精霊の馬』。イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭にて「最も革新的な映画賞」受賞（2008年）、日本ナイル・エチオピア学会第19回高島賞受賞（2013年）。

はじめに

映画的手法を用いて文化の記録と研究を行う民族誌映像の制作は、映像人類学の主要な研究実践として位置づけられてきた。筆者は、エチオピア地域社会の音楽・芸能をはじめとする、アフリカの無形文化を対象にした民族誌映像を制作し発表することを活動の中心に据えている。そのなかでもとくに、撮影者である自らが、被写体の人々と現地語で会話や討論を行い、そのやりとりを作品の主な構成要素にするという方法論を探求してきた。一方、民族誌映像制作の歴史を振り返ると、映像の科学的利用という背景から、撮影対象との関係性ややりとりを明示しない映像の様式が主流を占めてきたといえる。本稿でとりあげる、ドイツの国立科学映画研究所（IWF）が設立したエンサイクロペディア・シネマトグラフィカ（Encyclopedia Cinematographica、以下 EC）のフィルムは、人や動物の行動の比較研究という目的のもと、撮影者の存在を明示せず、対象の徹底した観察に比重を置いた映画的アプローチが貫かれている。ECは教育や比較文化研究で一定の成果をあげ（村尾 2006：252）、民族誌映像をはじめとする学術映画の様式に大きな影響を与えてきた。

しかしながら近年は、フィルムという保存形式や、前時代的ともみなされやすい“ストイックな”映像様式（後述）が障壁となり、本国ドイツはもとより、映像人類学の論壇のなかで、ECが注目されることはなかった。そんな EC フィルムが科学の括りから解き放たれ、時空を超えて、ここ日本で新たな意味と価値を与えられている。EC フィルムの上映会を事例に、アーカイブ映像の創造的な活用について考えたい。

エンサイクロペディア・シネマトグラフィカとは

ECは、1952年にIWF所長であったゴッタード・ウォ

ルフの提唱によって同研究所に設立された科学映像のアーカイブ事業である。当 EC フィルムのシリーズは、民族学をはじめ、科学技術、生物学（動物学、植物学、微生物学）における多様なテーマのフィルムによって構成されている。同研究所が中心となって体系的に制作、収集、保存してきたこれらのフィルムは、世界各国で研究と教育に活用されてきた。

ウォルフは EC フィルムについて、チンパンジーの映像を例に説明することを好んだという。EC フィルムでは、チンパンジーの一生をとらえた一本の長い映画ではなく、摂食、睡眠、交配等、チンパンジーの行動様式をテーマ別にとらえた短編映像を制作する。さらに、他の動物の行動様式も同じように記録、蓄積し、最終的には、チンパンジー間、あるいは異なる動物間の行動様式の比較を可能にさせる体系的な映像モザイクを目指すのである（Husmann 2007）。この論理は、物質文化、食文化、舞踊、儀礼を中心に構成されている EC の民族学分野の映像にも適用された。

EC フィルムの様式は、その禁欲的なまでの「客観」主義に特徴づけられる。たとえば EC の民族学フィルムでは、芸術的な表現や演出は避けられ、被写体に極力干渉しない撮影方法が求められた。編集においても時系列の改変、過度な解説、BGMは規制された。フランスの著名な民族誌映画作家のジャン・ルーシュが探求した、民族誌映画の演出や表現の次元の探求とは対極に位置する一種のストイシズムが、EC の民族学フィルムを貫いているといえる。12～15か国から選出されたそれぞれの学術分野の専門家が、編集委員として定期的に集い、IWFによって制作された新作映像を視聴し、EC フィルムの制作基準の維持に努めたとされる。

EC アーカイブは世界各地に設置されている。ドイツ、オーストリア、オランダ、米国、そして日本（1970年に

下中記念財団に設置)には完全な EC アーカイブが存在する。また、フランス、英国、ポルトガル、スイス、カナダ、トルコ等にも部分的な EC アーカイブがある。世界各地に設置された当アーカイブは、科学映像アーカイブのモデルと認識され、特に民族学分野の EC フィルムの様式は 20 世紀の民族誌映像の様式に大きな影響を与えた。

EC の制作に加わったスタッフたちは、世界各地にわたり、映像制作実習を行い、EC の確立した映像制作の方法を各国の学生たちに伝授してきた。たとえば中国では、1998 年から 2003 年まで、フォルクスワーゲン財団の助成のもと、同研究所のスタッフが雲南省の東アジア映像人類学研究所を定期的に訪れ、映像制作の指導を行った。ここからは、その後の中国の映像人類学界をリードする研究者にとどまらず、山形ドキュメンタリー映画祭等の国際的な映画祭でも活躍する映画監督が育っている。

しかしながら、1992 年を最後に EC の編集会議は行われなくなり、2010 年には EC の母胎である IWF が資金難のため、閉鎖されるに至る。2012 年 5 月、筆者は、隔年で開催されるゲッティンゲン国際民族誌映画祭の審査員として、ゲッティンゲン大学を訪れた。その際、1971 年より、EC フィルムの制作に携わり、上記の雲南やインドでの映像制作実習を指導したマンフレッド・クルー

ガーにインタビューをする機会を得た。彼は、インドネシア、パプアニューギニア、メキシコ、ブルキナファソ等に赴き、100 本を超える EC フィルムの制作に携わった経験を持つ。



マンフレッド・クルーガー氏 (2012 年 5 月、ゲッティンゲン大学)。

クルーガーは、研究所の閉鎖とともに EC フィルムの活用が途絶えることを「貴重な資産が、誰の目にも届かない、洞穴のなかに埋め込まれる」ような状況である、と述べていた。アジアで唯一フルセットの EC フィルムを管理・運用していた下中記念財団においても、近年ほとんど上映機会が途絶えていた。

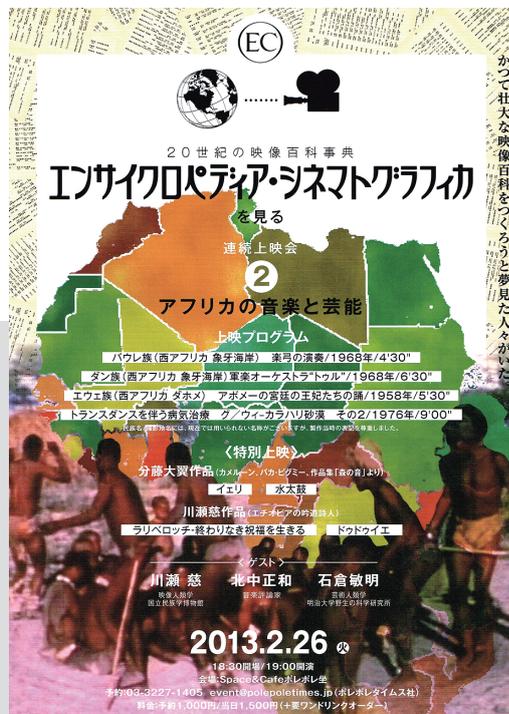
上映会発足の背景、上映会への準備

EC フィルムの活用を阻んでいる理由の 1 つとして、その保存形式が 16 ミリフィルムであり、素人には扱うのが難しいことがあった。しかしながら下中記念財団と、東京の映画館ポレポレ東中野の協力のもとで、毎回ゲストを呼んで、EC フィルムの上映会を開催するという話がまとまった。本上映会の詳細を通知するにあたり準備されたホームページ (<http://ecfilm-screening.jimdo.com>) には、EC フィルムとそれを現在上映する意義を以下のように解説してある。

『かつて壮大な映像百科をつくろうと夢見た人々がいた』

この上映会シリーズは、20 世紀を代表する壮大な映像アーカイブ「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」(EC フィルム) を、今に生きる私たちの目線で読み直し、虫干しして、多彩な分野の人々との対話を通して新しい息吹を吹き込む試みである。これらの映像のなかに、私達の未来に必要な宝物が見つけれられるかもしれない。

以上の文章にも示されるように、本企画は、EC フィルムを科学映像という本来の脈絡の上で鑑賞し、論ずるだけではなく、「多彩な分野の人々」との対話を通し、さまざまな角度から眺めることで、個々のフィルムの新たな価値を掘り出していこうという意図をはっきり押し出している。ポレポレ東中野・ポレポレ座において行わ



ECフィルム第2回上映会チラシ (ポレポレタイムス社提供)。

れた EC フィルム上映会の内容は表 (7頁) のとおりである。なお、フィルムに付随する民族名、撮影地名には、現在では用いられない名称、表現等が含まれるが「民族学映像インデックス」(財団法人下中記念財団 EC アーカイブス発行) の表記を尊重した。

EC フィルム上映会「アフリカの音楽と芸能」

EC フィルム第2回上映会『アフリカの音楽と芸能』の企画立案、フィルムの選定、当日のコーディネートは、筆者が中心となって行った。EC フィルムには、世界各地の音楽や芸能の記録が豊富にある。そのなかでもとくに、アフリカのいわゆる伝統音楽の記録は、人間の音楽行為の多様性と可能性を示し、西洋近代的な音楽の認識の在り方を問い直させる貴重な資料であるともいえる。

当会を実施するにあたり、フィルムの選定にはまず「民族学映像インデックス」を参照した。「民族学映像インデックス」のなかで、アフリカ関係の映像は400以上存在する。そのうち筆者が参照したセクション「音楽演奏」「舞踊」「演劇」「語り」のアフリカ関係映像は136作品ある。ただし、当資料は、フィルムのインデックス整備に主眼が置かれているため、フィルムに関する情報は、タイトル、対象民族・地域、制作年、フィルムの長さ等の基本的な情報のみと限られたものであった。さらに、財団に保管されている EC フィルムの形式は、一部デジタル化、ビデオ化されているものを除き、ほとんどが16ミリフィルムである。16ミリフィルムのDVDへの変換には時間と経費がかかる。そのためカタログから8~10ほどの映像を選出し、それらを試写したのちに、上映する EC フィルムを4~5本決定することになった。

フィルム修復・復元、デジタル化を専門にする東京光音社において、フィルム用の編集卓スタイルバックを用い、試写を行った。筆者が選出したフィルムは“弦楽器の演奏”“戦いと音楽行為”“宮廷芸能”“音楽と意識の変容”のテーマに関連するものである。これらを選んだ理由は、エチオピアにお

いて音楽職能集団の調査を行う筆者が、研究対象の集団との比較の観点から、上映会当日に、映像をめぐる議論をコーディネートしやすい、と判断したからである。

第2回上映会では、EC フィルムの撮影、制作アプローチとの比較の観点から、日本の映像人類学者2人、筆者と分藤大翼(信州大学)によるアフリカの音楽、芸能の映像作品(エチオピアの吟遊詩人のパフォーマンス、カメルーン Baka ピグミーの音世界)を上映した。筆者と分藤による作品は、被写体が撮影者の存在について言及する等、映像の背後にある両者の関係性を映し出している。筆者と分藤の作品を EC フィルムと並列し上映することにより、EC フィルムの当時の科学映像が貫いたストイシズム、すなわち制作者の存在をかくし、観察に徹した記録のスタイルをより視聴者にわかりやすく見せることをねらった。当日は、筆者の他、音楽評論家の北中正和、人類学者の石倉敏明を迎え、アフリカ音楽の記録に対するさまざまなアプローチ、そしてアフリカ音楽の創造性をテーマに討論を行った。北中は、音楽雑誌『ニューミュージック・マガジン』の編集や、FM ラジオの番組での DJ としての活動を通し、いわゆる“ワールドミュージック”を長年にわたり日本に紹介してきたことで知られる。また石倉は、明治大学野生の科学研究所等を拠点に芸術と人類学の交点から、主にアジアの神話

研究を行ってきた。アフリカ研究者である筆者とは異なる分野のゲストを招き、EC フィルムを通した異なる分野間の創造力あふれる対話を生み出すことをねらった。

当日に上映された EC フィルムの概要は以下のとおりである。

◆バウレの楽弓

コートジボアールのバウレによる楽弓演奏。楽弓は、藤の木でできた弓に張られた弦を、小さな棒で叩いたり、こすったりする。弦を口につけて、奏者の口、唇のかたちを変化させつつ、口の中で音を反響させる。また、歯を使って音を切ってアクセントをつけたり、喉からの音を加えたり、呼吸法を変え、音にバラエティを持たせている。

◆Dan の軍楽オーケストラ

コートジボアールのダンの太鼓と象牙のホルンによるオーケストラ。かつては戦場に繰り出す戦士を鼓舞するために奏でられた。戦士たちが戦場から戻る際にも演奏された。

◆宮廷の王妃たちの踊り

ダホメー王国の王都アボメイ（現ベナン共和国）の王宮群（1985年にユネスコ世界遺産登録）のなかの祖先を祭る廟堂で行われる女性たちの踊りを中心とする祭儀。



映像作品『ドゥドゥイエ』より。



映像作品『ラリベロッチー—終わりになき祝福を生きる』より。

◆トランスダンスを伴う病気治療

アフリカ南部のカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民グウィの病気治療を目的にしたダンス。ポリフォニー、ポリリズムの歌とともに、ヒーラーが踊りながら悪霊を追い出す過程。

◆『イエリ』『水太鼓』（ともに分藤作品）

カメルーン共和国の熱帯雨林に暮らす狩猟採集民バカが、森のなかの生活を通し奏でるさまざまな音を収録した映像集「森の音」(合計50分)より2作品を上映。『イエリ』は、象等の大型動物を男たちが狩る際に、女たちが動物をおびき寄せ、男たちと出会わせるために歌う歌。『水太鼓』は集落のそばの小川で、水浴びや洗濯をする時に行う、水面を叩き、あるいは手拍子も加わるポリリズム音楽。

◆『ラリベロッチー—終わりになき祝福を生きる』（川瀬作品）

エチオピア高原北部を広範に移動する“ラリベロッチ（単数：ラリベラ）”と呼ばれる吟遊詩人の夫婦の音楽活動における、人々と唄い手の相互行為の記録。

◆『ドウドウイエ—禁断の夜』（川瀬作品）

アジスアベバにおける楽師アズマリの男女による性を話題とした唄の掛け合い。

EC フィルムの多くには、各フィルムの撮影対象となった民族に関する歴史・文化背景、ならびにフィルムが収めた文化事象について論じたドイツ語（一部英語）の論文が存在する。上映会の当日は、それらの論文を参照し、撮影対象の民族誌的な情報を、上映前に来場者に対して筆者が口頭で説明した。しかしながら第2回の上映会用に選出したEC フィルムのうち「トランスダンスを伴う病気治療」のみ参考論文が存在しなかった。当集団の民族誌的な情報を得るために、筆者はカラハリの狩猟採集民研究を1987年から行っている国立民族学博物館の池谷和信に当フィルムを観てもらい、見解を聴いた。池谷は、本作品が撮影された1970年代中盤には人々の衣服はすでに洋服が主流であるはずなのに、登場人物たちが、動物の毛皮を中心とする比較的伝統的な衣服を着ている点に着目した。そこから、本作が制作者サイドから被写体への要請により、ダンスの“伝統的なすがた”を再演し記録した可能性が高い点を指摘した。上映会当日には、上記映像の上映後、カラハリ狩猟採集民のヒーリングダンスと変性意識、そしてその背後にある、宇宙・生命思想について筆者が文献（カツ 2012）を参照しつつ説明し、付随する話題として、日本の修験やチベット密教の修業における変性意

識の事例が、石倉より、自身の体験も踏まえて提示された。北中は、誰もが入手可能なアフリカ伝統音楽の入門的ともいえるCD シリーズを、民族音楽学者ヒュートレイシーによるフィールドレコーディングCDを中心に紹介した。

ゲスト間ではまた、撮影者の立場を映像の中でいかに位置づけるか、が議論の話題となった。たとえば、川瀬作品『ラリベロッチ』、『ドウドウイエ』のなかでは、撮影者である筆者やカメラに対する被写体の人々のさまざまにアクションや、それらを即興的に、歌詞のなかにとりいれていく音楽集団の姿が記録されている。撮影者やカメラの存在が対象の人々の行動様式や態度に映し出されるのを自然な現象としてとらえていることを、EC フィルムとの違いを念頭に説明した。

当日のゲストを含め、EC フィルムをさまざまな人々とまなごしを共有することにより、映像の対象や、制作アプローチに関する筆者が予想していない点に気付かされ、映像についての議論に広がりが出た。上映会当日の観客の反応は大方ポジティブなものであったが、アンケート結果によれば、反省すべき点もいくつかあげられる。たとえば、ゲスト間の議論の場において、筆者が人類学に関連する学術的な専門用語を用いすぎたことや、

話題が盛り上がりすぎて、議論の結論がうまく導き出されなかったこと等である。今後は、事前にゲスト間において、映像を通じた議論のキーワードをいくつか絞る工夫が必要となるであろう。



EC フィルム第2回上映会の様子（2013年2月、ポレポレタイムス社提供）。

今後の展望

当上映会の第3回においては、「かご編み」をテーマにした多様なEC映像とともに、かご作りの専門家であり収集家であるゲストが出演し、かご作りの実演が行われた。個々の映像に内在された潜在的な価値を掘り起こすべく、ECフィルムと他の映像のさまざまな組み合わせや、ゲストの身体を用いたパフォーマンスの実施等、今後会を重ねる中で、さまざまなECフィルムのプレゼンテーションをめぐる実験を検討していきたい。この実験を通し、ECフィルムの「科学主義」が相対化され、ECフィルムの背後にある制作者の意図や演出の次元が紐解かれ、20世紀の民族誌映像のまなざしの形成の舞台裏がより鮮明にみえてくるのではないだろうか。前述の「アフリカの音楽と芸能」上映会には、ジャズやロックなどの分野のプロのミュージシャンが少なからず来場し、ECフィルムのなかに捉えられたアフリカの音楽に刺激やインスピレーションを受けたようである。音楽、パフォーマンス、ビジュアルアート等の分野のアーティストがECフィルムを視聴することによって生み出す創造の領域を探るような試みも、興味深いであろう。

国立民族学博物館にも多くのECフィルムが保管されている。また当館におけるビデオテープレコーダの番組や研究映像も、それを上映し、共有する場の脈絡の変換により新たな魅力を放つ可能性がある。映像の情報伝達が多様化しつつある現在であるからこそ、上映会といういわば古典的なスタイルから、いまいちどアーカイブ映像の活用、さらにはそれを通じた新たな知、コミュニケーションの創造について、今後上映会の関係者を含めて取り組んでいく必要があるだろう。

ECフィルム第1回上映会 『屠畜』		2012年12月12日
ゲスト講師：関野吉晴・北出新司・本橋成一		観客数：93人
[上映プログラム]		
◆ ヴィルアンダースの家庭の屠殺 ベーコンとソーセージづくり	中央ヨーロッパ・チロル(1979/1980年)	29分30秒
◆ 初秋のトナカイの狩り集め、耳への刻印、去勢、屠殺と解体	北ヨーロッパ・ノルウェー/サミ人(1976年)	29分
◆ トナカイ肉解体とパン焼き、食事の準備	北ヨーロッパ・ノルウェー/サミ人(1976年)	21分
◆ 豚の屠殺と料理	西ニューギニア・中央高地/ファ族(1975年)	20分
[特別上映]		
『ある精肉店のはなし』 (ラッシュフィルム 10分程)		監督： 瀧本あや
ECフィルム第2回上映会 『アフリカの音楽と芸能』		2013年2月26日
ゲスト講師：川瀬慈・北中正和・石倉敏明		観客数：93人
[上映プログラム]		
◆ 楽弓の演奏	西アフリカ・象牙海岸/パウレ族 (1968年)	4分30秒
◆ 軍楽オーケストラ “トウル”	西アフリカ・象牙海岸/ダン族 (1968年)	6分30秒
◆ アボメーの宮廷の王妃たちの踊り	西アフリカ・ダホメ/エウ族 (1958年)	5分30秒
◆ トランスダンスを伴う病氣治療 その2	カラハリ砂漠/グウィ (1976年)	9分
[特別上映]		
『イェリ』 (2011年 1分38秒)		監督：分藤大翼
『水太鼓』 (2011年 2分36秒)		監督：分藤大翼
『ラリベロッチー-終わりなき祝福を生きる』 (2007年 30分)		監督：川瀬 慈
『ドウドウイエ』 (2013年 14分)		監督：川瀬 慈
ECフィルム第3回上映会 『かご編み』		2013年3月22日
ゲスト講師：本間一恵・中川重年		観客数：69人
[上映プログラム]		
◆ マニオクの圧搾カゴ “ティピティ” 編み	南コロンビア・モンターニャ/コファン族 (1970年)	6分
◆ マニオクの晒し	南コロンビア モンターニャ/コファン族 (1970年)	7分
◆ 大きなむしろ編み	ブラジル・アラグアイア地方/カラジャ族 (1960年)	12分
◆ 蓋つきの籠編み	タイ チェン・ライ県/アカ族 (1965年)	16分30秒
◆ 手さげかご編み	ブラジル トカンティンス地方/クラホ族 (1969年)	6分
◆ ヤシの葉の玩具づくり	ブラジル トカンティンス地方/クラホ族 (1965年)	10分
◆ 竜舌蘭繊維の糸づくりと紐づくり	コロンビア・シエラ・ネヴァダ・デ・サンタ・マルタ/アルファコ族 (1969年)	8分30秒
◆ ドーム家屋の建築	西アフリカ オートボルタ/リマイベ族 (1962年)	9分

上映作品一覧

【参考文献】

- リチャード・カツツ 2012 『癒し』のダンス：「変容した意識」のフィールドワーク 永沢哲・田野尻哲郎・稲葉大輔訳 講談社。
- Husmann, Rolf 2007. Post-war ethnographic filmmaking in Germany: Peter Fuchs, the IWF and the encyclopedia cinematographica. In B. Engelbrecht (ed.) *Memories of the origins of ethnographic film* pp. 282-296. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- 民族学映像インデックス 1992 財団法人下中記念財団 EC アーカイブス。
- 村尾静二 2006 「映像人類学の現在」村山匡一郎編 『映画は世界を記録する：ドキュメンタリー再考』 pp. 245-270 森話社。